

仙石山仏教学論集  
第 14 号（令和 5 年）

Sengokuyama Journal  
of Buddhist Studies  
Vol. XIV, 2023

## 南宋单刻本『八十華嚴』について

刘 园园



# 南宋単刻本『八十華嚴』について

刘 园园

## 要 旨

『八十華嚴』は漢訳されて以降、華嚴宗の根本經典として東アジア仏教界で広く信奉され、歴代の大蔵經に収録されただけではなく、単独の經典としても書写・刊刻されている。北宋時代に、大中祥符寺天宮經藏院で刊刻した1行15文字の北宋単刻本『八十華嚴』は、後の思溪版『八十華嚴』に影響を及ぼした。さらに、思溪版『八十華嚴』が1行15文字の版式を採用していることが後に流布した単刻本に影響を与える。南宋時代になると、思溪版を底本とする単刻本も現れたのである。

本論文では、宋元時代の大蔵經本の特徴を紹介し、その系譜を明確にし、同時代の単刻本に焦点を当て、特に南宋単刻本に着目し、その特徴を明らかにするとともに、大蔵經本と単刻本の関係についてさらに探究する。

## 1. はじめに

『大方広仏華嚴經』は、インドで成立した仏典をもとに、四世紀頃に中央アジアでまとめられたものと推定されている<sup>1</sup>。『大方広仏華嚴經』の漢訳として<sup>2</sup>、東晋の仏馱跋陀羅（359～430年）訳六十卷本『大方広

<sup>1</sup> 華嚴經の成立問題について、最初の研究は久野芳隆 [1930] である。そのほか須佐晋龍 [1930]、高峯了州 [1963]、p3～15 などが十地品、入法界品などに関する成立史的研究である。これらの諸研究によって『十地品』が2世紀頃、『入法界品』が163年以後に成立し、大華嚴經は350年ごろ中央アジアにおいて成立したことが推定された。これに対して近藤隆晃 [1933] は大華嚴經の成立年代を龍樹以前（2世紀頃）としている。鎌田茂雄 [1960] 川田熊太郎監修、中村元編『華嚴思想』、p500～501; 堀伸一郎 [2013]、p184 を参照。

<sup>2</sup> 鎌田茂雄 [1983]、p305～382。石井教道 [1979]、p150～151。木村清孝

仏華嚴經』（418～420年訳、以下、『六十華嚴』と略す）、唐代の実叉難陀（652～710年）訳八十卷本（695～699年訳、以下、『八十華嚴』と略す）、そして、唐の般若三蔵（8世紀ごろ）訳四十卷本（796年訳）がある。この中で、『八十華嚴』は、旧訳の『六十華嚴』と対照して『新華嚴經』とも呼ばれ、華嚴宗第四祖とされる澄観（738～839年）に深い影響を与え、唐宋時代の江南地域を中心に展開された華嚴結社の根本經典ともなった<sup>3</sup>。

『八十華嚴』の現存テキストは、概ね、刊本大蔵經、単刻本<sup>4</sup>、そして写本（日本古写經本や敦煌本など）の3種類に分けられる。筆者がその写本と刊本大蔵經のテキストを検討した結果、日本に伝わっている古写經本は古い形態を反映し、澄観の注疏からの影響を受けておらず、実叉難陀の漢訳本に近い状態を伝えていると考えられる<sup>5</sup>。一方、宋・元時代の刊本大蔵經は、その内容的な変化により、大別して修訂本と未修訂本の2つに分けられる<sup>6</sup>。これらの考察を踏まえ、本論文では、『八十華嚴』テキストについて宋元時代の大蔵經本の特徴を紹介し、その系譜を明確にし、同時代の単刻本に焦点を当て、特に南宋単刻本に着目し、その特徴を明らかにするとともに、大蔵經本と単刻本との関係についてさらに探究する。

[1992]、p3～34。

<sup>3</sup> 劉園園 [2023a]、p733～730。

<sup>4</sup> 単刻本は大蔵經系統以外に単独で刊行した經典である。現在、明確な紀年が知られている世界最古の単刻本はイギリスの大英博物館所蔵の咸通九年（868）に刊行された『金剛般若波羅蜜經』である（季羨林主編『敦煌学大辞典』、p682）。現在、知られている最古の単刻本『八十華嚴』は北宋時代に江南地区の華嚴結社が990～1000年に刊行したものである。即ち、後述する北宋単刻本である（劉園園 [2023a] を参照）。

<sup>5</sup> 石田茂作 [1966]、p1、によれば、『八十華嚴』は天平十一年（739）に書写されたという。実際に、『大日本古文書』第7巻を見ると、『八十華嚴』は天平三年（731）に書写されたのが最初であると記されている。拙稿「写本『八十華嚴』について」（未刊）で詳論する予定である。

<sup>6</sup> 劉園園 [2023b] 『『八十華嚴』テキストの変遷とその背景について』、待刊。

## 2、刊本大藏經系統の『八十華嚴』とその系譜

宋・元時代の刊本大藏經は、形式的特徴と目録構成という二つの基準に基づき、大別して三つの系統に分類される<sup>7</sup>。「第一類藏經」（開宝藏・高麗藏初雕・高麗藏再雕・金藏）、「第二類藏經」（遼藏）、「第三類藏經」（福州版・思溪版・磧砂版・普寧版など）である。三大系統にはいずれも『八十華嚴』が収録されているが、その中で、第一類開宝藏系統は、開宝藏本『八十華嚴』が逸失しているので、主に同系統の高麗藏や金藏の現存するテキストに基づいて論じることとする。第二類北方系統の遼藏本『八十華嚴』については、応県木塔で発見された3巻の残巻を中心に検討する。第三類の江南系統諸本『八十華嚴』に関しては、その中で福州版、思溪版、磧砂版及び普寧版に注目して考察を進める。

第一類のうち、開宝藏は、その成立時期と段階によって、全体的に初期本と後期本に分けられる。現存のテキストで、最も開宝藏初期の形態を反映しているのは南禅寺等に所蔵された高麗初雕本であり、それに対して、金藏本や高麗再雕本は開宝藏後期の形態を反映していると言われる<sup>8</sup>。その中高麗初雕本の現存本の影印版<sup>9</sup>によると、『八十華嚴』は17巻が残っており、その版式や千字文番号は開宝藏系統の標準的版式（1版23行、1行14文字、巻末に音義なし）と同じであることがわかる。また、金藏本『八十華嚴』（金藏本と略す）は現在では52巻が残っており、その版式は開宝藏系統の標準的な版式と同じである。加えて、高麗再雕本の所収經典の版式は一般に開宝藏系統の標準的な版式と同じであるが、再雕本『八十華嚴』<sup>10</sup>はそれと異なっており、1版24行、1行17字で、音義は各巻の巻末に付されている<sup>11</sup>。全体として、開宝藏系

<sup>7</sup> 竺沙雅章 [2000]、p281～282。方広鋁 [1991]、p246。

<sup>8</sup> 池麗梅 [2014]、p224～268。

<sup>9</sup> 域外漢籍珍本文庫編纂出版委員会『高麗大藏經初刻本輯刊』、第5-6冊。

<sup>10</sup> 仏教記録文化遺産アーカイブ <https://kabc.dongguk.edu>。

<sup>11</sup> 高麗再雕本の『四十華嚴』、『六十華嚴』、『八十華嚴』の版式にはいずれも1版24行、1行17字であり、音義は各巻の巻末に付されているという特徴

統で、『八十華嚴』は開宝蔵本に代表されるテキストと再雕本で置き換えられたテキストの二つがある。

北方系統の代表は遼蔵である。1974年に山西省応県仏宮寺木塔で発見された仏典のうち12巻が遼蔵の零巻であった<sup>12</sup>。これを見ると、その版式は1版27～28行、1行は17字という唐代写經の標準規格を継承しており、唐代の正統な写經系統を反映すると認識されている。その中で、『六十華嚴』は巻47の一部分が現存し、版式は1版27行、1行17字であり、標準的規格と同じであることがわかる。『八十華嚴』テキストは巻24、巻26、巻51のそれぞれ一部分が現存している。版式は1版28行、1行15字であり、遼蔵の標準的規格と異なっており、どの底本を採用したのかは不明である。遼蔵本『八十華嚴』の特殊な版式を見ると、雕刻された当時、その底本は一定の特殊性があったと推測される。

江南大蔵經系統のうち、成立年代が最も古いのは福州版であり、東禪寺本と開元寺本の二種類がある<sup>13</sup>。福州版『八十華嚴』の版式<sup>14</sup>は1版36行、1行17字の標準的な版式に従っている。福州版に次ぐ思溪蔵は、1版30行、1行17字を標準として折本、音義は各巻の巻末に付されている<sup>15</sup>。しかし、思溪版『八十華嚴』<sup>16</sup>の版式は、1版25行、1行15字である。思溪版に続いて江南地域では磧砂版や普寧版が彫られた。磧砂版の中で、現存する磧砂版『八十華嚴』<sup>17</sup>は元代に雕刻され、その版式は1版30行、1行17字の江南系統の標準的な版式と同じである。普寧版『八十華嚴』

---

がある。

<sup>12</sup> 山西省文物局 中国歴史博物館編『應縣木塔遼代秘蔵』、p24～25。

<sup>13</sup> 野沢佳美 [2015]、p39～47。

<sup>14</sup> 宮内庁書陵部所蔵の福州版を見ると、『八十華嚴』は巻首で刊記がないので、東禪寺本か開元寺本かわからない。そのため、福州版『八十華嚴』と呼ばれている。

<sup>15</sup> 野沢佳美 [2015]、p49～52。

<sup>16</sup> 岩屋寺思溪版の画像（国際仏教学大学院大学の日本古写經研究所所蔵）により、その版式がわかる。

<sup>17</sup> 『磧砂大蔵經』、綾装書局、2005年、23～24冊。

は江南系統の標準的な版式と同じである<sup>18</sup>。

福州版や磧砂版、普寧版『八十華嚴』は江南系統大藏經の標準的な版式を採用しているのに対して、思溪版『八十華嚴』は江南系統大藏經の中に属しながらも、1行15字の版式であり、他と異なるという点で特殊である。大藏經の中では、思溪版『八十華嚴』は遼藏本の版式と一致しているが、両本が相互に影響し合っていたことを示す直接的な証拠はない。さらに、思溪版『八十華嚴』が特殊な版式を提示している理由として、その底本が大藏經本ではなく、当時江南地域の華嚴結社が彫った北宋単刻本であったことが判明している<sup>19</sup>。

以上のことから、同系統のものは基本的に版式を同じくするが、『八十華嚴』に限っては同系統においても版式に違いが見られることが明らかとなった。各系統の標準的版式と異なるのは、第一類開宝藏系統の高麗再雕本の『八十華嚴』（1行17字）、第二類遼藏の『八十華嚴』（1行15字）、第三類江南系統の思溪版『八十華嚴』（1行15字）である。そして、三大藏經系統の中で『八十華嚴』に二種以上のテキストが存在することは三大系統に共通して見られる。

三大系統の『八十華嚴』に見られる変化の根本的な理由については、従来の研究では検討されてこなかった。実は、再雕本『八十華嚴』の巻末には、その内容の変遷を明らかにするいくつかの校勘記が掲載されている。再雕本に確認できる11条の校勘記を手がかりに、刊本大藏經の現存テキストを比較すると、大藏經には二種類の系譜が存在する。一つは「無修訂本」、即ち実又難陀の訳本をほぼ忠実に伝え、再雕本、思溪版のような、澄観等による影響が及んでいないテキストである。もう一つは「修訂本」、即ち『華嚴經疏』及び『華嚴經疏注』に依拠して修訂を行っているテキストである。その中には、開宝藏を受け継ぐ金藏本や福州版のように『華嚴經疏』からの影響を受けたものもあれば、元代の普寧版や磧砂版のように北宋浄源の『華嚴經疏注』からの影響も併せて受けているものもある。

<sup>18</sup> 何梅 [2014]、p85～89。

<sup>19</sup> 劉園園 [2023a] を参照。

『八十華嚴』のテキストが三大系統において変化した根本的なきっかけは、中国の華嚴祖師の意図に沿って修訂したものと、そうでないものの二つに分かれたことに由来する。

### 3、北宋単刻本『八十華嚴』の特徴

前述の中で、三大系統の大蔵経を、そのテキスト属性に基づいて修訂本と未修訂本の二つの種類に分けた。これを手がかりに、単刻本のテキスト属性を判定する。現存する『八十華嚴』の単刻本はいくつかあるが、本項では主に宋代の単刻本、特に北宋単刻本の特徴を紹介する。

台北故宮博物院（以下、「台北博」と略称する）<sup>20</sup>、台北図書館（以下、「台北図」と略称する）には、三種の宋代の単刻本『八十華嚴』が収蔵されている。「国立故宮博物院善本古籍資料庫」<sup>21</sup>が公開した情報によれば、台北博の図書文献処に、清朝皇室旧蔵の北宋単刻本『八十華嚴』が2点（「故宮淳化本」と「淳化後修補本」）所蔵されており、いずれも国宝級の文化財である。また、『国立中央図書館善本書目』<sup>22</sup>によれば、台北図にも北宋単刻本『八十華嚴』が一点現存している。三種の単刻本はいずれも北宋淳化元年（990）から咸平3年（1000）にかけて杭州の龍興寺で雕造された1行15字の刊本である。その中で、「淳化後修補本」『八十華嚴』巻1の尾題の後に、以下のような題記がある<sup>23</sup>。

今此印板、依『華嚴大疏』所釋經本校勘已定。其間經文或有欠失文字、並是翻譯時誤。觀疏主一一檢會新舊二經梵夾、將所欠文編在疏

<sup>20</sup> 台北故宮には本文で紹介した宋代のもの以外に、二種類刊本がある。一つは元代の手抄本：『大方広仏華嚴経』八十卷附『普賢行願品』一卷（唐実又難陀訳、元釈溥光泥金銀写袖珍本、四函、四冊）；もう一つは明代の手抄本：『大方広仏華嚴経』八十卷附『普賢行願品』一卷（唐実又難陀訳、明弘治十六年鈔本、十六函、八十一冊、一行も十五字）とある。

<sup>21</sup> 台北故宮博物院善本古籍資料庫（<https://rbk-doc.npm.edu.tw/npmtpc/npmtpall?@@@1798588353>）を参照。

<sup>22</sup> 台北国家図書館古籍与特蔵文献資源（<http://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/>）を参照。

<sup>23</sup> 台北故宮博物院善本古籍資料庫：

（<https://rbk-doc.npm.edu.tw/npmtpc/npmtpall?@@@1798588353>）を参照。

中。不敢擅添経内。請後賢悉之耳。

この経板〔の底本〕は、『華嚴大疏』が注釈した『八十華嚴』に拠って校勘し確定したものである。『八十華嚴』のテキストにおいて文字の欠失があるのは、並びに翻訳の時の誤りである。『華嚴大疏』の著者である澄観は、新旧二種の梵文テキストを確認し、欠文の所をもって、『華嚴大疏』に収録した。敢えて『八十華嚴』の中には加えなかった。この事情は後世の者に知悉してもらいたい。

この校勘題記によると、龍興寺で『八十華嚴』を刊刻した際に、テキストの底本は、澄観の『大華嚴経疏』に拠って校勘されていた。『八十華嚴』は、翻訳の時に文字の欠失の問題が生じた。そこで、澄観は『六十華嚴』と『八十華嚴』の二種のサンスクリット原典を確認し、欠文を『大華嚴経疏』の中に収録したが、『八十華嚴』の本文は修訂しなかった。

杭州の龍興寺、即ち後の大中祥符寺に置かれた華嚴社は、可孜と智海を中心として、仏教經典の雕刻・印造・流通にも取り組み、当時においても後世においても重要な役割を果たしていた。可孜と智海は、先に咸平3年(1000)に『八十華嚴』(81巻、版式は1行15文字の大字版)を雕造し、千部を印造して天下に流通させた。その結果、宋代に湖州で思溪版が刊刻された際に、『八十華嚴』の底本として、従来の福州版テキストではなく、可孜と智海が大中祥符寺天宮経蔵院で刊刻した1行15字の単刻本が採用されたのであろう。この選択がなされた理由は、当時の華嚴結社の影響力が非常に広範であったことに加えて、その底本に関連している。北宋単刻本は明確に、澄観の『華嚴経疏』に基づいて修訂されていないことを指摘している。つまり、北宋単刻本は原訳本に近いテキストである。また、北宋単刻本の底本の特殊性から、思溪版『八十華嚴』は彫刻の際に、修訂された大蔵経本を選択するのではなく、その底本として修訂されていない北宋単刻本を選んだであろう。

#### 4. 南宋単刻本『八十華嚴』の特徴

宋代の『八十華嚴』の単刻本には、前述で紹介した北宋単刻本の他に、

南宋単刻本も存在する。早稲田大学の古典籍総合データベース<sup>24</sup>によれば、1行15字の単刻本『八十華嚴』巻42（ハ05 00560）（以下、「早大本」と略称する）が所蔵されている。また、宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧<sup>25</sup>が公開した情報によれば、南宋紹興年間（1132～1162年）に開板された1行15小字版の単刻本『八十華嚴』（以下、「書陵部本」と略称する）が所蔵されている。

以下、これらの南宋単刻本『八十華嚴』の書誌情報とその特徴を紹介する。

#### 4.1 「早大本」について

早稲田大学の古典籍総合データベースが公開している情報によれば、当館所蔵の『八十華嚴』巻42は宋版残欠本である。「早大本」は折本であり、天地に単行の墨線があり、朱点や文字の右への白丸の書込があり、朱・墨書入がある。欠損・虫損がある。巻首に朱印が押されている。版式は、1紙5面、1面5行、1行15文字であり、1紙の高さは31cm、1面の幅は12cmである。版心は、紙のつなぎ目の左1行にあり、1行2段で、上段は巻数、下段は版号が記されている。巻42の首題に「大方廣佛華嚴經卷第四十二」、訳者欄に「于闐國三藏沙門實叉難陀譯」と記されている。巻末に音義釈がある。

「早大本」には刊記がなく、この版本は出版地・出版者・出版年ともに不明である。しかし、早稲田大学図書館の古典籍総合データベースの解説によると、「早大本」も1行15字という版式を採っている宋版残欠本であるとされている。このような版式は北宋単刻本および大藏經の中の思溪版と非常に類似しており、三者間に一定のつながりがあるかどうかは、さらにテキスト内容の対比が必要である。北宋単刻本、思溪版及び「早大本」の巻42の經典本文や音義を比較した結果、三本は、構成・版式・内容において近似するので、互いに密接な関係があるかもしれない。

<sup>24</sup>早稲田大学の古典籍総合データベース：

(<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>) を参照。

<sup>25</sup>宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧 (<http://www.sido.keio.ac.jp>) を参照。

一方、文字や音義の総数は異なる。これにより、年代上のレベルを推測することができる。そして、年代から北宋単刻本は最古で、次は思溪版で、次は「早大本」である。内容・文字からもこのような刊刻の順番が推測できる。思溪版は北宋単刻本に基づいて修訂された。「早大本」は思溪版に基づいて復刻した。思溪版は雕刻の過程で底本として北宋単刻本を採用したが、思溪版は雕刻後、後世にも一定の影響を与え、例えば「早大本」は思溪版に基づいて復刻した。また、北宋単刻本や思溪版は澄観の影響を受けていない唯一のテキストであるため、早稲田本も澄観の影響を受けておらず、修訂本ではないと推測できる。

#### 4.2 「書陵部本」について

「書陵部本」はコンパクトな小字本であり、実叉難陀漢訳の『大方広仏華嚴經』八十巻に「普賢行願品」一卷が附されており、全部で八十一巻（二十帖）である。同本の書誌情報は、『図書寮典籍解題漢籍篇』<sup>26</sup>に記載されている。近年、斯道文庫の「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧～書誌書影・全文影像データベース～」に、全巻の図版と詳細な書誌情報が公表されている（以下「書誌解題」と略称する）。従来の目録等の記載を参照しながら同本の書誌情報をまとめよう。

「書陵部本」（函架番号:450・1）は折本で、外衣は方形蜀江錦帙で、繫文絹表紙（19.8×8.8cm）であり、天地に単行の墨線があるが、行間に界線はない。版式は、1版7面、1面9行、1行15文字<sup>27</sup>、字体は欧陽詢体である。1紙の高さは14cm、1面の幅は8.3cmである。版心は、紙のつなぎ目にあり、1行3段であり、上段は巻数、中段は張数、下段は刻工が記されている。各帖の巻首に「高山寺」（長方形陰刻印）があることから、もともと梅尾高山寺の旧蔵品であったと分かる。若干の虫損箇所があり、部分的な補修を経ている。

<sup>26</sup> 題解「大方廣佛華嚴經 二十帖 宋版 四五〇・一」、『図書寮典籍解題漢籍篇』、p180～181。

<sup>27</sup> 「書陵部本」は序と經典本文の版式が互いに異なる。経序の版式は1版7面、1面9行、1行14文字である。

『八十華嚴』巻1の前に、「天冊金輪聖神皇帝製」の「大周新譯大方廣佛華嚴經序」があり、各巻の首題に「大方廣佛華嚴經巻第〇」、訳者欄に「于闐三藏沙門實叉難陀譯」と記されており、尾題の後に一行の空白を空けて音義釈が見える。

「書陵部本」は計20帖からなり、第1帖は「大周新訳大方広仏華嚴經序」(天冊金輪聖神皇帝製)と巻1～巻4、第2帖は巻5～巻8、第3帖は巻9～巻12、第4帖は巻13～巻16、第5帖は巻17～巻20、第6帖は巻21～巻24、第7帖は巻25～巻28、第8帖は巻29～巻32、第9帖は巻33～巻36、第10帖は巻37～巻40、第11帖は巻41～巻44、第12帖は巻45～巻48、第13帖は巻49～巻52、第14帖は巻53～巻56、第15帖は巻57～巻60、第16帖は巻61～巻64、第17帖は巻65～巻68、第18帖は巻69～巻72、第19帖は巻73～巻76、第20帖は巻77～巻80及び「入不思議解脱境界普賢行願品」、「大方広仏華嚴經後序」を収録している。

「書陵部本」には、巻67と巻72を除いて、他の各巻の末尾に校勘題記と喜捨刊記等が附されている。それら計81点の諸題記が記されている<sup>28</sup>。

この中で、最も重要な刊記は巻70の末に記されている以下の刊記である。

紹興府華嚴會始者欲募萬菩薩、每名化錢四百文、同開此經。而所施微細、卒難成就。後承施主各自發心、願開一板、乃至多板、或占刊一卷者。起自紹興九年八月三日、至十一年十月望日畢工。今將每板施主盡開逐卷之後、所有萬菩薩名字、蓋爲零細不及其數、止可雕兩卷、難以逐一具於卷末。伏願施財善友、若男若女、以此善利、普及一切有情、俱明華嚴性、共證遮那海。華嚴會經坊幹縁弟子姚發、蔡(立義)、周希悅、魏應之、程照、徐顯、姚杲、張紹、姚宗、姚法誠、

<sup>28</sup> 馬辛民[2012]「宋紹興府華嚴會刊『大方広仏華嚴經』題記輯録」

(『中国典籍与文化論叢』、p214～225。)では、宮内庁書陵部が所蔵する南宋単刻本『八十華嚴』の刊記を翻刻したが、それ以上の分析研究を行っていない。このため、本論文では、刊記を繰り返すことなく、その中で重要なものだけを抽出して分析する。

王富、趙謂、劉珏、鍾況、葉彬、沈處厚、都會首保義郎姚景純<sup>+</sup>、華嚴會得度僧如戒、祖堯、宗印、子賢、子才、齊賢、慧文、可謙、行嚴、祖欽、如辯（主華嚴會壽聖院住持傳賢首祖教普證大師擇交）。紹興府華嚴会は、最初、信者万人を募り、一人当たり 400 文ずつ寄附してもらうことによって、この經典（『八十華嚴』）を開板しようとしていた。しかし、集まった寄附金は少なく、事業の展開は難しかった。その後、寄附者には、各自に発心し、一枚から複数枚、或いは丸ごと一巻の彫造を単独で支援してもらうことになった。

〔この事業は〕紹興九年(1139)八月三日から始まり、紹興十一年(1141)十月十五日に完成した。今、各板の寄附者を巻末に刻むことにしたかったが、信者万人もの名前は細かくて数も膨大だったため、二巻だけそうしたが、他の諸巻には寄附者を逐一記することができなかった。すべての寄附者、更には一切の有情が、皆、華嚴性を悟り、共に遮那海を証することを謹んで願う。華嚴会経坊幹縁弟子の姚發・蔡(立義)・周希悦・魏応之・程照・徐顯・姚杲・張紹・姚宗・姚法誠・王富・趙謂・劉珏・鍾況・葉彬・沈処厚、都會首の保義郎姚景純、華嚴会僧の如戒・祖堯・宗印・子賢・子才・齊賢・慧文・可謙・行嚴・祖欽・如弁。（主華嚴会・寿聖院住持・伝賢首祖教普証大師擇交。）

この題記は、「書陵部本」の彫造事業の責任者であり、紹興府華嚴会の長、寿聖院の住持である普証大師擇交が記したものである。この題記によれば、当該の小字版『八十華嚴』は、紹興 9 年(1139)から紹興 11 年(1141)まで、紹興府寿聖院に置かれた華嚴会が開板したものであろう。紹興府の寿聖院は、いわゆる「雲門六寺」の一つである。後晋天福 6 年 (941)に創建された寺院であり、初めは「上菴」と呼ばれていたが、北宋熙寧 3 年 (1070)に「寿聖院」という寺額が正式に与えられ、隆興元年 (1163)に「廣福院」と改名された<sup>29</sup>。

<sup>29</sup> 宋・施宿等撰『会稽志』巻七：「廣福院在縣南四十里、晉天福六年、建初名上菴、熙寧三年六月、以治平德音、賜寿聖院額、隆興元年、例改今額、雲門四寺相比廣福最在其上小而秀邃可喜。」とある。

「書陵部本」の刊記に、巻 70 の外に、更に 5 点明確な年代が記載されている。その中で、最も古い年代は紹興 9 年（1139）、最も新しい年代は紹興 11 年（1141）である。現存する刊記の内、計 46 点は地方の官員の喜捨刊記、32 点は僧俗のものであり、その中の 7 点は華嚴会の信者による捨財し開版したものである。「書陵部本」は紹興で開版されたものであるが、喜捨刊記を見ると、紹興の信者に限らず、錢塘、浙東、浙西、台州、明州、常州、開封、臨安などの僧俗も参加しており、特にこの經典の多くの経巻は官員の寄附によっていた。そして、紹興府の華嚴会の影響力が紹興に限らず、周辺地域の士族や民衆の支持を得ていたことを反映している。また、『八十華嚴』が当時の社会で注目されていたことが窺える。

加えて、「書陵部本」の底本に関しては、巻一の前に、以下のような刊記がある。

此経依紹興府広教院旧本校勘 伝写有闕略差訛处 依清凉国師疏文  
添入改正。

この経は、紹興府広教院の旧本によって校勘した。伝写の過程で生じた欠文や誤写は、清凉国師（澄観）の『華嚴大疏』によって補足訂正した。

この校勘題記によると、「書陵部本」の底本は紹興府広教院の旧本によって校勘し、伝写した過程で生じた誤写等は、澄観の『華嚴大疏』によって訂正されている。果たして、この題記は、紹興府寿聖院華嚴会が刊刻した時の題記なのか、或いは元々の底本にあったものなのかは不明である。いずれにせよ、南宋単刻本『八十華嚴』の祖本は、澄観『華嚴経疏』によって修訂されていることは確かである。「書陵部本」が採用した 1 行 15 字の版式は、現存するテキストの中で北宋単刻本および思溪版と非常に類似している。そして、北宋単刻本や思溪版が採用されたテキストは未修訂本であることがわかった。一方、「書陵部本」が内容的に本当に刊記に記載されているように、『華嚴経疏』の内容に基づいて修訂されたのかどうか、さらに具体的な内容を考察する必要がある。何を手がかりにして修正されたかを調査するために、大蔵経中の系譜分類を参照し、再雕本の巻末刊記を手がかりに、『華嚴経疏』に該当するものを探し、北宋単

刻本や思溪版、「書陵部本」の具体的な内容に対応して、「書陵部本」のテキスト属性を明らかにする。

### 4.3 三本のテキストの比較

再雕本『八十華嚴』の場合には全7巻の巻末の11箇所に校勘記が添えられているが、今回は校勘記の代表的な例のいくつかに焦点を当てて分析する。本項では、主に再雕本巻末の校勘記と『華嚴經疏』の記載を参照しながら、北宋単刻本や思溪版、「書陵部本」の内容を比較し、「書陵部本」の特徴を考察する。

①再雕本巻4に次のような一節がある。

復次、普光焰藏主火神、得悉除一切世間闇解脱門。普集光幢主火神、得能息一切衆生諸惑漂流熱惱苦解脱門。大光遍照主火神、得無動福力大悲藏解脱門。無盡光髻主火神、得光明照耀無邊虛空界解脱門。種種焰眼主火神、得種種福莊嚴寂靜光解脱門。十方宮殿如須彌山主火神、得能滅一切世間諸趣熾然苦解脱門。威光自在主火神、得自在開悟一切世間解脱門。光照十方主火神、得永破一切愚癡執著見解脱門。雷音電光主火神、得成就一切願力大震吼解脱門<sup>30</sup>。

巻4の巻末に、この箇所に対する次のような校勘記がある。

主火神、疏主云、長行脱第四、准梵本、勝上藥光普照主火神、得普能除煩惱塵解脱門、偈云衆妙、即勝上義耳。或有本則云、衆妙宮殿主火神、得大慈悲廣蔭衆生解脱門、亦恐是傳寫脱漏爾。

「主火神」の経文で、「疏主」〔澄観〕は、長行の第四が欠落しているが、梵本によって、ここでは「勝上藥光普照主火神、得普能除煩惱塵解脱門」であり、偈には「衆妙」と書かれ、即ち「勝上」の意味である。或いはある本によっては、「衆妙宮殿主火神、得大慈悲廣蔭衆生解脱門」と書かれ、亦恐らく転写過程での脱漏によるものかもしれない。

再雕本巻4の該当箇所には、何某「主火神」は全部で九位いる。疏主

<sup>30</sup> T10,no.279, pp.15c28-16a10。

である澄観の説を引用した校勘記によると、「無盡光髻主火神」の前に「衆妙宮殿主火神、得大慈悲廣蔭衆生解脱門」の「主火神」が欠落している。疏主が言うように、ここにもう1つの「主火神」を加えれば、後の偈の「衆妙」と対応する。そこで、『華嚴経疏』巻7に同様の記載があり、「第六主火神長行十法。有云、準梵本、此脱第四……四有云、準梵本、神名勝上藥光普照、法門名普能除煩惱塵、謂劫海行滿故。今能現通滅惑、偈云「衆妙宮神」、同前列名、衆妙即勝上義耳。然諸本多無、或有本則具云衆妙宮殿主火神、得大慈悲廣蔭衆生解脱門、恐是傳寫脱漏耳。」<sup>31</sup>という記述がある。再雕本巻4の巻末に第四の「主火神」が欠落していることを指摘する校勘記を残している。確かに、再雕本でもこの内容は欠落している。つまり、再雕本巻末に校勘記を残していることは、漢訳原本に近い古形が伝承されていることを示す。欠落した内容が經典に追加されているのではなく、巻末で『華嚴経疏』を参照しながらその欠落部分を示している。前述したように、大蔵経系統の中で、再雕本と一致し、修正されていないテキストを採用しているのは思溪版である。つまり、思溪版巻4の該当箇所には第四の「主火神」も欠落している。思溪版の底本である北宋単刻本も、対応する部分は第四の「主火神」が欠け、未修訂本である。

「書陵部本」はその該当箇所を見ると、經典の正文にその欠落字句、即ち『華嚴経疏』が言及する第四の「主火神」が補われている。その底本は經典の原文を修訂していたことがわかり、その意味で、漢訳原本を反映したものではなく修訂本である。

この校勘記に対応する諸本の内容的な変化により、単刻本系統も2つに大別される。一つは無修訂本であり、翻訳本来の姿を維持している。例えば北宋単刻本である。もう一つは修訂本であり、『華嚴経疏』の影響を受け、『華嚴経疏』によって修訂を加えていることがわかる。

この校勘記とそれに類似するものは巻3、巻4の他に2箇所、巻5、巻11、巻12bで、合計7箇所に見られる。

<sup>31</sup> T35,no.1735,p. 553a1-11。

②再雕本巻12に次のような一節がある。

諸佛子、此娑婆世界東、次有世界、名為密訓。如來於彼、或名平等、或名殊勝、或名安慰、或名開曉意、或名真實語、或名得自在、或名最勝身、或名大勇猛、或名無等智。如是等百億萬種種名號、令諸衆生各別知見<sup>32</sup>。

巻12の巻末に、この箇所に対する次のような校勘記がある（巻12a）。

次有世界、名為蜜訓、唯九名者、疏主云、勘晉經、開曉意下闕一、或名聞慧。

次に世界があり、名づけて「蜜訓」という。唯九つの名のみであることについて、疏主は晉經〔即ち『六十華嚴』〕を校勘して、「開曉意」の下に一つ、すなわち「或名聞慧」を欠いている、と言う。

この校勘記から、「蜜訓」という世界で、澄観は『六十華嚴』を参照し、そのうちの一つの「或名聞慧」が欠落しているという。同様に『華嚴經疏』巻13に、「諸佛子此」下彰娑婆隣近十方、亦為十段。密訓唯九者、勘晉經、開曉意下闕一聞慧<sup>33</sup>という記述がある。しかしながら、再雕本の対応箇所には、九つの名しかない。つまり、再雕本は漢訳原本に近いと推定される内容を伝え、修訂は加えられていない。北宋単刻本や思溪版も同じ、未修訂本である。

この例の最も興味深いところは、修訂本である南宋単刻本においては、『華嚴經疏』に言及している「或名聞慧」を付加していない。つまり、『華嚴經疏』がこの部分で言及した欠けた内容について、南宋単刻本はテキストの内容の中で修訂していない。この巻12aの校勘記と類似しているのは巻8、巻10、巻12cのものである。

以上からわかるように、再雕本では巻3、4、5、8、10、11、及び12

<sup>32</sup> T10,no.279,p.59b12-16。

<sup>33</sup> T35,no.1735,p.592c10-12。

の総計7巻の巻末に校勘記があり、全部で11か所の内容に相当する。北宋単刻本や思溪版、「書陵部本」を比較すると（附録1を参照）、第一に、巻8や巻10、巻12a、巻12cでは、どのテキストも修訂されていない。第二に、残りの7か所には本文の変更が見られるため、無修訂本と修訂本の2つに分けられる。北宋単刻本や思溪版は無修訂本であり、最も古い形を保存している。南宋単刻本は修訂本であり、『華嚴經疏』に基づき、修訂を加えたものである。

## 5. 結び

以上、本論文は、宋代単刻本『八十華嚴』を中心に引き上げ、それらの書誌情報や成立史及び底本などを考察した。特にそれらの単刻本の刊記を見ると、澄観の『華嚴經疏』との関係があることがわかった。この問題から、再雕本に確認できる11条の校勘記を手がかりに、北宋単刻本や思溪版、南宋単刻本の現存テキストを比較すると、次のような点が明らかになった。

第一に、単刻本には大蔵経系統と同様に、二種類の系譜が存在する。一つは「無修訂本」、即ち北宋単刻本や早大本のような、澄観等による影響が及んでいないテキストである。もう一つは「修訂本」、即ち「書陵部本」で、澄観の『華嚴經疏』の影響により、すでに修訂が加えられたものである。また、『八十華嚴』のテキストは南宋以降、より複雑になり、地域によって華嚴結社は、『八十華嚴』を彫刻の過程で、中国の華嚴祖師の著述に対する態度を異にしている。

第二に、宋代から、1行15字の版式を採用した『八十華嚴』は、大蔵経系統でも、単刻本系統でも、その流布の痕跡を見ることができる。しかし、この特殊な版式だけを頼りにしてテキストの属性を判断するのは正確ではなく、具体的な内容を見る必要がある。注目すべきは南宋以降、大蔵経系統であっても単刻本系統であっても、『八十華嚴』のテキストの変遷は澄観の影響を非常に大きく受け、修訂本が主流となっていることである。

## 参考文献

### 【一次資料】

域外漢籍珍本文庫編纂出版委員會『高麗大藏經初刻本輯刊』、西南師範大學出版社、人民出版社、2012年。

季羨林主編『敦煌學大辭典』、上海辭書出版社、1998年。

『磧砂大藏經』、綾裝書局、2005年。

宋・施宿等撰『會稽志』（台灣商務印書館、19--?）。

東京大學史料編纂所『大日本古文書』、東京大學出版會、1977年。

『圖書寮典籍解題漢籍篇』、宮内庁書陵部編、昭和三十五年（1960年）。

### 【著作】

石井教道〔1979〕『華嚴教學成立史』、平樂寺書店。

川田熊太郎監修、中村元編〔1960〕『華嚴思想』、法藏館。

木村清孝〔1992〕『中國華嚴思想史』、平樂寺書店。

山西省文物局 中國歷史博物館編〔1991〕『應縣木塔遼代秘藏』、文物出版社。

『大正新脩大藏經』、高楠順次郎・渡辺海旭主編、全 85 冊、大正新脩大藏經刊行會、1924～1934 年。

高峯了州〔1963〕『華嚴思想史』、百華苑。

竺沙雅章〔2000〕『宋元佛教文化史研究』、汲古書院。

野沢佳美〔2015〕『印刷漢文大藏經の歴史：中國・高麗篇』、立正大學品川図書館。

方広錫〔1991〕『佛教大藏經史（八—十世紀）』、中國社會科學出版社。

### 【論文】

石田茂作〔1966〕「奈良朝現在一切經疏目錄」、『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』、東洋文庫、1 頁。

鎌田茂雄〔1983〕「『華嚴經』とその注釈書ならびに研究文献」、『華嚴學研究資料集成』、東京大學東洋文化研究所、305～382 頁。

久野芳隆〔1930〕「華嚴經の成立問題—特に入法界品について」、『宗教

- 研究』第7巻第2号、94～114頁。
- 近藤隆晃 [1933] 「大華嚴の成立年代」、『宗教研究』第10巻第3号、108～124頁。
- 須佐晋龍 [1930] 「華嚴經十地品の研究」、『現代仏教』1月号、60～75頁。
- 池麗梅 [2014] 「『統高僧伝』の文本演變——七至十三世紀」、『漢語仏学評論』2014年第四輯、224～268頁。
- 馬辛民 [2012] 「宋紹興府華嚴会刊『大方広仏華嚴經』題記輯録」、『中国典籍与文化論叢』2012年第五輯、214～225頁。
- 堀伸一郎 [2013] 「華嚴經原典への歴史—サンスクリット写本断片研究の意義」『智慧／世界／ことば』シリーズ大乘仏教4、春秋社、183～211頁。
- 劉園園 [2023a] 「北宋における華嚴結社の刊経活動とその影響：『八十華嚴』を一例として」、『印度学佛教学研究』71(2)、733～730頁。
- 劉園園 [2023b] 「『八十華嚴』テキストの変遷とその背景について」、『仏教学』第65号、待刊。

#### 【データベース】

- 宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧 (<http://www.sido.keio.ac.jp>)
- 台北故宫博物院善本古籍資料庫  
(<https://rbk-doc.npm.edu.tw/npmtpe/npmtplall?@@1798588353>)
- 台北図書館古籍与特蔵文献資源 (<http://rbook.ncl.edu.tw/NCLSearch/>)
- 仏教記録文化遺産アーカイブ ( <https://kabc.dongguk.edu>)
- 早稲田大学古典籍総合データベース：  
(<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>)

#### <キーワード>

南宋単刻本、『八十華嚴』、華嚴結社、思溪版



## 附録 1 『八十華嚴』経典テキストの変化

文 本 卷 数	日本古写経本				単刻本	
	正倉院本	興聖寺本	七寺本	金剛寺本	故宮本（北宋）	宮内庁（南宋）
卷 3		闕文	闕文	闕文	闕文	<u>大海處攝持力迦樓羅王、得入佛行廣大智慧海解脫門。</u>
卷 4a		闕文		闕文	闕文	衆妙宮殿主火神、得大慈悲廣蔭衆生解脫門
卷 4b		闕文		闕文	闕文	一切世間衆導師、法雲大雨不可測、消竭無窮諸苦海、此離垢塵入法門
卷 4c		闕文		闕文	闕文	<u>香幢莊嚴主城神、得開發衆生清淨妙智解脫門</u>
卷 5		闕文	闕文	闕文	闕文	普覺悅意聲菩薩摩訶薩、得親近承事一切佛供養藏解脫門。普清淨無盡福威光菩薩摩訶薩、得出生一切神變廣大加持解脫門。普寶髻華幢菩薩摩訶薩
卷 8		闕文	闕文	闕文	闕文	闕文
卷 10		闕文	闕文	闕文	闕文	闕文
卷 11	闕文	闕文	闕文	闕文	闕文	次有緊那羅城、 <u>名</u> 、遊戲快樂。次有摩睺羅城、名、金剛幢
卷12a	闕文	闕文			闕文	闕文
卷12b	闕文	或名能仁、或名解説王、或名智惠明、或名善誓、或名能寂滅、或名大慈			闕文	或名、無上尊、或名、大智炬、或名、無所依、或名、光明藏、或名、智慧藏、或名、福德藏、或名、天中天、或名、大自在。
卷12c	闕文	闕文			闕文	闕文

注：句読点や下線の表記はすべて筆者による。

刊本大藏經本				
江南系統大藏經本			中原系統大藏經本	
福州版	思溪版	磧砂版	金藏本	再雕本
大海處攝持力迦樓羅王、得入佛行廣大智慧海解脫門	闕文	大海處攝持力迦樓羅王、得能竭衆生煩惱海解脫門	大海處攝持力迦樓羅王、得能竭衆生煩惱海解脫門	闕文
衆妙宮殿主火神、得觀如來神通力示現無邊際解脫門	闕文	衆妙宮殿主火神、得大慈悲廣蔭衆生解脫門		闕文
一切世間衆導師、法雲大雨不可測、消竭無窮諸苦海、此離垢塵入法門	闕文	一切世間衆導師、法雲大雨不可測、消竭無窮諸苦海、此離垢塵入法門		闕文
香幢莊嚴主城神、得觀如來自在力普遍世間調伏衆生解脫門	闕文	香幢莊嚴主城神、得破一切煩惱臭氣出生一切智性氣解脫門		闕文
普覺悅意聲菩薩摩訶薩、得親近承事一切諸佛供養藏解脫門。普清淨無盡福威光菩薩摩訶薩、得出生一切神變廣大加持解脫門。普寶髻菩薩摩訶薩	闕文	普覺悅意聲菩薩摩訶薩、得親近承事一切佛供養藏解脫門。普清淨無盡福威光菩薩摩訶薩、得出生一切神變廣大加持解脫門。普寶髻華幢菩薩摩訶薩	闕文	闕文
闕文	闕文	闕文	十不可說	闕文
闕文	闕文	闕文		闕文
次有緊那羅城、多遊戲快樂。次有摩睺羅城、名、金剛幢	闕文	闕文		闕文
或名、開慧	闕文	或名、開慧		闕文
或名、無上尊、或名、大智炬、或名、無所依、或名、光明藏、或名、智慧藏、或名、福德藏、或名、天中天、或名、大自在。	闕文	或名、無上尊、或名、大智炬、或名、無所依、或名、光明藏、或名、智慧藏、或名、福德藏、或名、天中天、或名、大自在。		闕文
闕文	闕文	闕文		闕文

## Summary

# On the Block-printed Editions of the Huayan Jing in Eighty Scrolls Independently Published During the Southern Song Dynasty

LIU Yuanyuan

Since the Huayan Jing in Eighty Scrolls 八十華嚴 was translated into Chinese, it has become widely revered in East Asian Buddhist circles as a fundamental scripture of the Huayan School 華嚴宗. It has not only been included in successive Tripitakas but has also been transcribed and printed as an individual sūtra.

In the Northern Song Dynasty, the edition formatted in 15 characters per line published at Dazhong Xiangfu Temple's Tiangong Sutra Repository 大中祥符寺天宮經藏院 later influenced the Sixi Zang 思溪藏. In addition, the fact that the Sixi Zang used a format of 15 characters per line influenced the block-printed editions that circulated later. By the Southern Song Dynasty, single block-printed editions based on the Sixi Zang version also appeared.

This paper introduces the characteristics of the Tripitaka editions during the Song and Yuan periods and clarifies their lineage, focusing on the contemporary block-printed editions, especially those in the Southern Song Dynasty. In addition to clarifying these characteristics, it will also further explore the relationship between the Tripitakas and the single woodblock print editions.

**Keywords:** separately block-printed editions; Huayan Jing in Eighty Scrolls; the Huayan Society; Sixizang 思溪藏

*Postgraduate Student,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*